

日本山岳写真協会 創立 80 周年を迎えて

日本山岳写真協会 会長 橋本 勝

1939 年（昭和 14 年）12 月に東京山岳写真会として発足。1947 年（昭和 22 年）に「日本山岳写真協会」（JAPA）と名称を改めて、令和元年の今年、創立 80 周年を迎えます。

創成期からの会員は風見武秀、船越好文、内田耕作、清水武甲、塚本閣治、柴崎高陽、穂苅三寿雄、中野峻陽、三浦敬三、「山と溪谷」創業者の川崎吉蔵等が所属。草創期の実力者達に加え、東京雲稜会の羽賀正太郎、穂苅貞雄、赤沼淳夫、前田真三、川口邦雄、羽田栄治等が当協会を発展させてきました。

特別出展として、山と写真を愛された天皇陛下が、ご即位前の皇太子殿下の時には、平成 18 年から 13 年連続で日本山岳写真協会展にご出展されています。また協会写真展に数度の行啓を賜りました。

80 年といえば自分の年齢に近い。人に例えれば後期高齢者の範疇に入りますが、当会はなお意気軒高であり、若い血潮がみなぎっております。

山岳写真界の俊英として当会が不動の位置を維持できているのは、先輩によるところが多としています。当会は先達の尽力と精進によって、山岳写真の世界に深く根を下ろしてきました。諸先輩には及ぶべくもありませんが、創立 80 周年の節目に役を仰せつかっている者として、これを契機に会の一層の発展に寄与したいと念じております。本協会への相変わらぬ積極的なご支援をお願いいたします。

映像は記録でもあります。ある一瞬の事実を切り取る。日本に写真が輸入された明治期にはすでに山岳写真が発表され、近代登山の草分けである「日本山岳会」の設立間もない時期、早くも山岳写真集が発刊されています。写真の記録性を示す証左であります。

しかし、映像芸術は単なる記録ではありません。一瞬の事実を切り取る写真の意味を改めて考えるのも写真家の重要な視点であります。山岳風景という限られた被写体と向き合う我々は、過去から現在に至る山容の変貌にも気を配る任を負っています。

万年雪が消える。植生が変わる。獣の痕跡が失せる。豪雨で山が崩れる。それを如何に切り取るか。切り取られた自然は明晰な発信者となり、写真は時代の証言者としての役割も担います。そこに我々の表現者としての実力が問われてまいります。

自然の様々な営みや移り変わりは、先駆者が撮った黎明期から今日に至る山岳写真の隅々に記録されているはずであります。時には過去の作品に触れ、今日と比較し、時の蓄積から僅かな変化を読み取ることも忘れてはなりません。自然と対峙する日常にいるからこそ、環境に敏感でありたいと思います。

写真はアナログからデジタルへと大きく変貌してきました。日進月歩の撮影機材にも目を見張ります。加えて画像処理技術が一般化し、画像処理によってあるべき物を削除することも加えることも可能になりました。だが、汗の結晶を表現してこそ山岳写真であります。技術革新が如何に進もうとも、そこに行かなければ見る人の意識を変えるような感動は切り取れません。

創立 80 周年は通過点に過ぎません。日本山岳写真協会は常に革新し、時代を築いていきます。

「百の頂に百の喜びあり」深田久弥の至言を胸に、喜びを切り取り、表現したいと念じています。